

愛用していたピックアップトラックが飾られており、そのトラックの横にはカーター元大統領や家族との写真が飾られ、最後にはサムの妻ヘレンを中心とした社会貢献活動が示されていた。

創業者サムの逝去後、ウォルマートの評判は出店予定地近隣の商店や地元自治体の消費者からの反対運動やアソシエイツと呼ばれる社員に対する待遇の低さなどによって低下している。誕生50年を経て、ネガティブな側面が目立ってきているとはいえ、ベントンビルを訪れ、その原点に触れてみると、アメリカのど田舎から世界的な大企業を生み出したサム・ウォルトンの実直さが垣間見られた。そして、彼がこの田舎から一生離れず、都会の雑音を遮断して、すべての無駄をなくし、「エブリデイ・ロー・プライス（毎日低価格）」のために全精力を傾けたからこそ成功できたことが実感できた。そういった意味では、ウォルマートは地元名古屋を離れず地域とともに発展したトヨタと近いDNAを持つ企業といえるだろう。

わざわざ訪れるのは難しいだろうが、アメリカ南部を訪れる機会がある方はぜひ訪れることをお勧めしたい場所である。



ベントンビルウォルマートの前身であるバラエティストア（現在のウォルマートビジターセンター）にて

The Ceremony of the Keys ロンドンで毎夜行われている“鍵の儀式”

経営学部
功刀由紀子

ロンドン観光の名物といえば、バッキンガム宮殿前で繰り広げられる衛兵交代の儀式を挙げる人は多いことでしょう。その華やかなパフォーマンスは、見物の観光客を魅了してやまない儀式です。この楽しい儀式とは打って変わり、夜のロンドンで秘かに、でも約700年の長きにわたって一日も欠かさず続けられている儀式があります。場所はロンドン塔。ロンドンを守る要塞として、20年間を費やして建てられたロンドン塔は、王室の宮殿でありながら政治犯を収容、処刑するための牢獄としても使用され、特に王位継承に関わる処刑、暗殺、幽閉といった血なまぐさい歴史で有名な観光名所の一つでもあります。

このロンドン塔で毎夜行われている“鍵の儀式（The Ceremony of the Keys）”とは、どのような儀式なのでしょう。実はこの儀式にも、バッキンガム宮殿前の儀式同様、女王陛下の衛兵が参加しています。そして参加者はもう一人、ロンドン塔といえばおなじみの Yeoman Warder（王室直属の看守とでも和訳するのでしょうか）、“Beef Eater”の愛称でおなじみであり、赤と黒のチェダー王朝風の衣装に身を包んだおじさんです。

では、700年の歴史を誇る“The Ceremony of the Keys”を再現してみましょう。始まりは毎夜きっかり午後9時53分、そして終わりは毎夜午後10時ちょうど、つまりたった7分間の短い儀式なのです。

午後9時53分、一人の Yeoman Warder が片手

に灯の入ったランタン、もう一方の手には大きな鍵束を持ってロンドン塔の本館 (White Hall) 前の道を歩いてきます。するとそこに6人の衛兵が銃を持って待ち構えています。そして衛兵の一人がランタンを受け取った後、Yeoman Warder を取り囲むようにして「The keys をエスコート」し、ロンドン塔と外部をつなぐ通路に向かって行きます。通路の扉、つまりロンドン塔への入口と White Hall の正面入口の扉に鍵をかけた後、6人の衛兵と Yeoman Warder は「The keys をエスコート」した場所に戻って行くのですがその途中で、銃を構えた1人の衛兵に遭遇します。この衛兵は、「The keys をエスコート」した6名の衛兵と1人の Yeoman Warder の足音を聞きつけ、何しろ漆黒の闇の中、不審人物の侵入と勘違いし、銃を構えながら次のように声をかけます。

「Halt.」すると The Keys のエスコート隊は歩みを止めます。続く短い応答は大変興味深い内容です。

「Who comes there?」ここで「Who goes there?」ではないことに注目してください!

「The Keys.」 「Who」との質問に、「The Keys」と答えています。

「Who's Keys?」どこの鍵ではなく、だれの鍵と聞いています。

「Queen Elizabeth's Keys.」これは、現在エリザベス女王が即位しているための答えです。

「Pass Queen Elizabeth's Keys. All's well.」

そして質問をした衛兵はその場から去って行きます。一方、The Keys のエスコート隊が元の場所に戻ってくると、そこには交代の衛兵が隊列を組んで待っています。Yeoman Warder は手にした鍵束を衛兵の隊長に渡し、二言、三言言葉を交わします。これは残念ながら聞き取れませんでした。最後に全員で「アーメン」と唱えたようです。そして bugle (軍隊で使うラッパ) が緩やかなメロディーを奏で儀式は終わります。このラッパを吹く時刻が、ちょうど午後10時なのです。

このような7分間の短い儀式が、約700年間毎夜ロンドン塔で執り行われているのです。ロンド

ン塔自体は、ウィリアム征服王 (William the Conqueror) により約1000年前に建てられたものであり、この“The Ceremony of the Keys”は建てられてから300年程のちから始められたようです。しかし、始められた由来は定かではないのです。ただ、当初はロンドンを守る要塞であったものが、王室の宮殿として使われるようになり、王室の財宝や絵画、彫像などが運び込まれるようになりました。さらに、政治犯の牢獄として使用されるようになり、ロンドン塔の安全面、つまりは財宝の盗難防止と政治犯の逃亡防止のために、夜間はロンドン塔のすべての扉に鍵をかける必要に迫られたということのようです。

夜間に Yeoman Warder がロンドン塔のすべての扉に鍵をかけるだけのことならば、このように様式化した儀式にすることもないように思うのです。聞くところによると、鍵をかけることになった当初は時刻も決っていなかったため、ロンドン市内に出掛けていた衛兵がロンドン塔から締め出されることが頻繁に起こったということです。そのため、1826年当時ロンドン塔の城守であったウエリントン公爵 (the Duke of Wellington) は、施錠時刻を午後10時と定め、衛兵はその時刻までに全員ロンドン塔内に戻るように決めました。しかもこの午後10時という時刻を、昼間と夜間の衛兵交代の時刻とし、“The Ceremony of the Keys”の最後に奏でられるラッパのメロディーを、すべ



“鍵の儀式”とは全く無関係ですが...
ロンドンの街中を牛が走る? いえいえ、
無添加、無香料の乳飲料を製造している企業、
その名も“innocent”の車でした。

での扉に施錠し昼間の護衛は終了したという衛兵交代の合図としたわけです。

となると、7分間の中で繰り上げられる短いドラマは、700年間の歴史の中で遭遇したエピソードを様式化したものであると推測され、このような様式化されたエピソードも含めて衛兵交代を儀式化したと考えられます。

ところでこの儀式、筆者は全く知らなかったのです。去る3月研究目的で、イギリス農務省や消費者団体に聞き取り調査を行うためロンドンに出掛けました。その際、消費者団体に関わっていた方の招待により、この珍しい儀式を知ることができたのです。この儀式は一般公開されているとはいえ、夜間であり、さらにロンドン塔内の狭い場所が舞台であるため、一晚20~30名程度の事前予約による見学を受け付けているようです。興味のある方は、ロンドン塔事務所に手紙で予約をすると受け付けてもらえるとのことでした。ちなみに、現在の待ち時間は約6ヶ月とのことでした。

では筆者が招待されたとはどのようなルートか、ですか？ それは、Yeoman Warder に知人がいれば、いとも簡単に見学できるということです。ロンドン塔の敷地内に、Yeoman Warder 専用のパブがあり、このパブの客は、事前予約見学とは別に見学させてもらえるという特権を持っているのです。

鍵の儀式を見終えてロンドン塔を去るとき、迷彩服に身を包み、銃をしっかりと抱え周囲を窺いながら足早に立ち去るグリーンベレーの青年数名とすれ違いました。今もイラクに派兵している英国は、爆破テロ対策にも気を配っています。今現在、ロンドン塔を警護しているのは、熊皮の帽子をかぶった衛兵ではなく、グリーンベレーの彼らなのです。彼らの警護下、毎晩絶えることなく行われている衛兵交替と施錠の儀式“The Ceremony of the Keys”は、歴史と伝統を重んずる英国文化の象徴といえるでしょう。しかしながら、国際社会の現状と比較したとき、そこに違和感を覚えるのは筆者だけでしょうか？